

南支から中支へ

召集の想い出（その一）

愛知県 竹内 章

私は、昭和十一年徴集兵役であります。当時の家族構成は、母、妻子、妹の五人で、従業員が数人の小売商だった。

兵役は甲種合格で、第二補充兵役編入であっただけに体力的には至極健康に恵まれていた。

昭和十二年（一九三七）、現役入隊の同級生の送別会を開き、元気づけて送ったものである。同年七月七日夜半、盧溝橋で日中両軍が衝突し、北支事変から支那事変にと拡大、見送った学友も呉淞の敵前上陸で戦死、帰還する遺骨を駅頭で迎えたものであった。戦線は北支・中支・南支へと広がり中華民国全土にと日中全面戦争に発展、日本軍は転戦に転戦を重ね次々に要衝を攻略、その戦勝気分酔ったものである。その反

面、次々と召集令状の来た友人を見送る日々であり、その兵力は大陸に送り込まれもしたが、戦争が長びくにつれ、戦況は何となく硬直化し、泥沼にのめりこんだ様相すら感じられた。

昭和十四年五月十二日、滿蒙国境では滿州国軍と外蒙軍との衝突があり、日ソはこれに介入、ノモンハン事件にと発展、大敗北という手痛い目にあい、同年九月十五日に停戦したものである。

この年の九月三日に、欧州では英仏が対独戦を布告し第二次大戦が勃発、世界戦争への様相を見せてきた。

昭和十五年九月二十二日、日本軍は北部仏印に進駐、現地フランス軍と衝突、戦線はますます拡大せられてきたのである。

このような情勢下で、日本の軍備は国民の犠牲のもとにますます強化せられ、予備役はもちろん、軍隊経験なき補充兵役の者まで一週間以上の遠方旅行は禁止させられ、いわば足止めを強制せられたという、禁令のようなものが実施された。

昭和十六年七月に、米、英は日本の国外資産の凍結をなし、米英中蘭はA B C Dラインという経済封鎖の強硬措置を仕掛けて来たのである。資源なく輸入国である日本にとっては致命的であり、国内の重要物資は極度に欠乏し、国民生活はますます悪化、耐乏生活上積みである。

政府は消費生活の混乱を避けるために市場販売価格の統制を計り、諸製品の査定、証紙の貼布を実施、公定価格制度が施行され、違反者には嚴罰主義でのぞみ、罰金刑、体刑が実施された。同時に奢侈品禁止令も公布された。しかしながら、やみ行為が横行し始め、物資の買いあさり、買い占めは、官憲の目を盗んで盛んに行われたものである。経済警察の目は光り、違反者の摘発は厳しく、国民生活は苦しく窮屈な状態となってきた。「戦争だ」と苦しくともジッと我慢の子である。「撃ちてしまむ、勝つまでは」とこらえたものであった。

製造業界は世をあげて仕入実績、販売実績、生産実績等の実績がものを言う時代となり、また非生産事業

はどんどん廃業に追いやられたり、企業整備が進められ、反面、軍需産業は拡大、強化の方向に入り、我々は兵隊か徴用かの二者択一の心境であった。物資不足と軍需品増産で業界の企業整備はますます強化され、小企業は転廃業を余儀なくされた。

昭和十六年十二月八日、大詔が下り、日本は米英に対し宣戦布告し、当日未明、日本海軍はハワイ真珠湾攻撃を敢行し太平洋戦争に突入、いよいよ戦線は拡大されていった。

新聞、ラジオ報道を見聞きし、来たるべき時が来たの感を深め、いづれ自分にも召集令状が来るであろうと予期し覚悟をしていた。

昭和十六年十二月中旬、ついに来た白紙召集（教育召集）令状を受けとった。さて受けとって見ると覚悟はしていたものの、家族のことを思った時、何かしら背筋が「ゾーッ」とした気持でもあり、白紙であったことが、一面ではホッとした気持でもあった。しかし、もう一度令状に目を移した時、心なしか少し手が震えていたような気がする。でも赤紙（臨時召集令

状)でなくて何よりであったと思った。しかし喜んで良いのか悲しむべきか、何と家族に伝えるべきか悩んだけれども、いずれ知らせなければならぬことなので、勇気をふるって知らせることにした。

入隊は一カ月後の翌年一月であり、三カ月の教育召集でもあるというので、気軽な気持ちでもあったからよかった。家族たちも時節柄「おめでとう」と儀礼的には言っはくれたが私の心は重かった。

まず身辺の整理を行い、取引先には、後々のお願いやら挨拶に歩き、やや気分的には楽になったけれど、歳末でもあることから体は非常に多忙を極めた。忙しいうちに越年、正月を迎えた。明るいはずの正月も、私には複雑な気持ちの正月であった。家族で迎えた元旦も最後になるか、再度迎えることが出来るかと思つた時、この正月こそ思い出に残る最上の正月にしようかと心に誓つて、家族共々に楽しく過ごした。

「光陰矢の如し」と言うが、この一カ月の早さを紙しむじみと味わつた事はかつてなく、一生の中で忘れることはできないことである。

一月中旬(出発前夜)わが家の二階で、親族、友人、隣組の人達と共に、出陣祝いでもあるまいに水盃の送別会を聞き、夜の更けるのも忘れて語り別れを惜しんだ。

翌朝快晴、五錢玉を縫いこんだ千人針の腹巻(死線を越す意味)と、日の丸の寄せ書きを町内の人達から贈られ、それを腹に巻き、地元の御社業葉神社に参拝、社殿で武運長久の祈願を行い、町内の人達、友人知人、学童生徒の歓呼の声に送られ、半田の目抜き通りの銀座本町を通り、国鉄半田駅まで行進、駅頭で多数の見送りの人達に挨拶、万歳の声を受けデューゼルカーに乗車、半田に別れを告げ、市兵事課の係りに引率されて、静岡駅にて下車、第三十四連隊に入隊、中隊内務班に配属されたのが私の軍隊生活の始まりである。

入隊翌日から兵科教育を一カ月受けることとなる。慣れない軍隊の共同生活であるが、村井、伊藤二等兵がよく失策をおこしてくれるために、我が班内同期生は連帯責任をとらされたもので、これは大きな悩みで

もあった。軍事訓練、内務教育は初めての経験であり大変な苦痛でもあった。しかしその苦痛を忘れさせてくれるものが一つある。それは、毎日すがすがしく眺められる富士の霊峰であった。愛知県人である私には何か引きつけられる魅力があった。

二月になって、一カ月間の歩兵教育の所定を終え、富士山ともお別れして名古屋陸軍病院に転属、練兵分院において申告、私たちには宿舎を名古屋駅前の笹島分院にあてられた。毎日の日課は、練兵分院まで班付に引率され、隊伍を組んで徒歩で通い、人体構造、衛生学、看護術の学科、担架操作、患者の応急措置、患者救出の実習等の繰り返しである。楽しい記憶としては、毎朝点呼前に行う分院前広場での早朝体操と、中村公園前鳥居までの駆け足であった。それは、社会人を毎日身近に見ることができ、また接触があったからでもある。

笹島分院内務班では、話に聞いていたとおりの軍隊生活を思わせる厳しさがあったと思われるが、受けとり方は人様々であると思う。点呼終了後における教育

と制裁、また不審番の上下番の時の衛兵司令に対する交代申告の動作、あるいは不審番巡回時、年下の古兵が難しい隠語の軍隊用語でいびる意地悪さ。情けないやら、腹立たしいやら、悔しいやらで、ムカムカし、反抗したくなるような衝動にかられる気持ちを押さえるせつなさである。しかし楽しいこともある。それは面会日である。

外泊なき我々に与えられる喜びは、この外出と面会だけである。そしてその面会の都度、家族が届けてくれるウイスキーだ。その待ちどうしさ。しかしそのウイスキーの隠し場所に苦勞する。ちょうど、私の寝台前の床板が三十五センチ四方の間仕切りの蓋があったことは幸いであった。蓋をこじあけることに成功、この場所に隠し、毎夜、消灯後や不審番巡回後に飲み体を温め、体を休め溜飲を下げたものである。しかしこんなことは長続きするものではない。ある時、隣に就寝している戦友に見つかってしまった、自分の飲酒量は半減してしまっただが、戦友の喜ぶ姿を見た時、楽しくもあった。

昭和十七年四月十八日、野外担架演習のため班長に引率されて、名古屋の庄内川堤で実習訓練を受け、小休止中の出来事である。はるか名古屋市街地上空に飛行機二機。タバコを吸いながら「今日は名古屋市で防空演習の訓練中だなア」と戦友と話しあっていた。しばらく見つめていると一筋の黒煙が上空に高く上がってゆく。また一筋また一筋と黒煙は広がってゆく気がする。飛行機はどこともなく飛び去り見えなくなってしまった。私は、さすが名古屋だ演習でも実感がこもり実戦さながらであり、焼夷弾の威力は恐ろしいものだと感じていた。しかし黒煙は消えず広がる一方のように見える。

「おかしいなア」と思っていると、突然引きつったような甲高い班長の声で「名古屋地区に敵機来襲、練兵分院が爆撃を受け目下延焼中、本隊は演習を中止し直ちに練兵分院に向かって早駆けで帰還する。全員早駆け前へ進め」の号令。何か緊迫したものが背筋を走った。先ほどまで考えていたイメージは瞬間に吹っ飛び、早駆けで批把島橋を渡り、単独担架をかつぎ全

力で力走、力いっぱい走りに行った。そして練兵分院には、二番か三番で駆けつけた記憶がある。帰還してみると練兵分院はひどくやられ、配属衛生兵は汗みずくで真っ黒になって患者の救護避難や消化に大奮闘、我々も片付け作業の使役に協力した。いよいよ国土が実戦場化したと思い、何か身の引き締まる気がした。

その後の情報によれば「昭和十七年四月十八日土曜日、日本東海上一二〇〇メートル地点の航空母艦ホーネットより発進した双発爆撃機十六機は、京浜、阪神地区並びに名古屋、四日市初空襲せり、うち二機は昼下がりに名古屋空襲」と発表された。

我々も教育期間の満期も近く、陰口では今度の教育兵はひ弱な兵隊で最低だと聞いていたが、今度の名古屋初空襲における大活躍で、陰口のイメージは一転してしまった。全員宮庭集合の命令、心の中では先日の空襲における活躍に対し報奨の言葉か、あるいは召集解除になるのかと身勝手な考えで集合した。今日でいよいよ三カ月ぶりで、軍隊生活ともお別れして社会人として家庭に戻れると。季節的には桜も散り葉桜であ

るが、春麗のころかと心も浮き浮きとした気持ちで整列した。ところが自分の意とは反し、「引き続き臨時召集を命ず」との鶴の一声の命令である。一瞬あ然とし、おそらく顔面は蒼白、硬直化し、心の動揺は覆い隠すすべもなかったであろうと思う。

笹島分院に戻っても、ソワソワして複雑な気持ちである。班内において、それぞれ転属先に部隊名の発表があり、私は鳳八九七一部隊配属と聞いた。戦線地域は秘なので行先不明である。しかし被服の関係で南の方向であることは想像できた。準備完了、いつでも出勤OKである。もう外出もないので、古兵の則武一等兵に家庭への連絡を依頼した。

いよいよ出発当日である。非常な好天に恵まれ、天も私の門出を祝福しているようである。我々出征兵は練兵分院に集結、院長の激励の訓示と挨拶があり、外地出征の申告を行って二カ月有余見慣れた練兵分院に愛着の気持ちを持ちつつ、顔なじみになった戦友からも見送られ分院をあとにした。通い慣れた桜通りを西進、名古屋駅に向かって行進開始。途中沿道を埋める

県民、家族、友人知人の熱い目を見つめ、そして見送られ、以心伝心とでもいうのか、お互いの気持ちは通じ合っている気がしたものである。黙々として歩く私も複雑な気持ちである。行進中、沿道の人波の中から一人の幼児がチョコチョコと走り出て来た。この幼児を追うように走り寄る一人の老婆がいる。ふと見ると余人に非ず、母とわが子ではないか。私はハッとした。憲兵はいないかと見回した。懐かしさとかわいさで子供をしっかりと抱きしめてやりたいような衝動にかられたが、グッと気持ちを押しえて行進したものである。ふと沿道に目をやれば、妻が手を振っている姿が強く目に焼きつく。目頭に熱いものを感じた。しかしこの行軍中、警備の憲兵の目が光っているのに「無神経なおふくろだなア」と思った。この行動も子供をつかっての一つのジェスチャーであり、私に好物のウイスキーを手渡す手段でもあったのである。これも子を思う親心のなせる離れ業で、危険をおかしてまでもと思った時、ジーンと熱いものがこみあげてきた。母なればこそと、感謝の気持ちでいっぱいであった。つ

いに憲兵の目にとまってしまった。何か注意を受けているようであったが上手に言い訳をしたようである。

我々は駅頭から階段を登りプラットホームに整列後、軍用列車に乗車した。

汽車の窓からふと見ると、武豊行の列車が停車しているではないか。その窓ガラス越しに親子三人が一生懸命に手を振って、何やら口を動かしている姿がよく見える。何を言っているか分からないが意味はよく分かっている気がした。

突然、けたたましく発車のベルが鳴りわたる。いよいよ発車である。列車はゆっくりと動き出した。反対側の列車の親子は一層激しく夢中で手を振る。幼いわが子が小さなかわいい手を振っている姿は、私の脳裏から消え去ることは永久にないであろうと思いつつ、私も強く手を振ってこれに応じた。列車はだんだんとスピードを増していった。いつしか東海道線から山陽線に入り、やがて呉港に到着した。

そして呉軍港に碇泊している輸送船に乗船を完了した。ただちに出航である。客船ではなく貨物船であ

る。設備はお粗末なもので、牛、豚並みである。この輸送船で思ったことは、静岡の第三十四連隊では、「お前達は一銭五厘並みだ、歩兵銃の弾丸は消耗品でもお前達より高価である。一発の弾丸でも貴重だ」と言われたことを思い出し、なるほど荷物並みで人間扱いではない、これが戦争かなと思った。口には出さないが心では「わが子よ、妻よ、おふくろさんよ、いつまでも達者でな」と念じ、またこれで祖国ともお別れか、この日本の土を再び踏むことができるであろうか、青々とした山々の峰も見納めかと思った時、「あゝ祖国よ、我が郷土よ、さらば」と郷土の方角へ、自然に頭が下がったのである。そして、家族や友人知人との再会のできる時があらうかと、寂しさと、不安な気持ちがかこみあげてきたものであった。

瀬戸内海を航行し、かなりの時間が経過した。船は大海へ出た模様である。船室では演芸会が始まった。こんな風景を見ると、のんびりとして戦地へ行くなんてことは考えられなく嘘のようである。息詰まる空気

から逃れるため甲板へ出て見ると、既に周囲は暗く、山々も丘も眼前にはなく、あるのは夜空に満月が煌々と海原に映り輝き、月の光が尾を引いている。夜光虫は非常に美しく海の螢のような輝きをもっている。こんな光景を見るのは初めてである。しばらく行んで見ていると、何となく冷え肌寒く感じて来た。少し船も揺れ出した、恐らく玄界灘であろう。

満月や星空、海原の夜景の、あまりの美しさに酔い見惚れているうちに、自然に歌が口ずさまれて来た。

「舟が揺れるぞ 玄界灘よ

祖国 さらばの 月に泣けよ」

間をおいて次に詩吟を吟ずる

「山川草木 転荒涼 十星風星 新戦場

征馬不前 人不語 金州城外 立斜陽」

何度となく歌い、吟じたものである。

三日ほど過ぎたと思つた頃、船は台湾の基隆港に寄港した。輸送船の周囲には、台湾の現地人が蚤民舟にバナナをいっぱい積んでいっせいに船に向かって進ん

でくる光景は、シネラマを見ているようで、見事でもあり壮観でもある。船べりに集まって、高い声でバナナの売り込みである。甲板から縄のより目に五十銭札あるいは拾銭札を挟んで縄を下ろしてやると、金額分の大きなバナナの房を結んでくれる。何十隻かの蚤民舟のバナナがきれいに売り切れてしまふほど面白く売れる。本場ものだけに非常に熱しておいしかった。

基隆には二日ほど碇泊し、渡航の安全を確認、錨をあげて台湾海峡を斜横断し、珠江を上り黄埔に上陸、鉄道で広東へ。広東駅で下車して広東市内を通過して、鳳兵団の所在地へ向かった。師団司令部で現地到着の申告を済ませ仏山の第四野戦病院への配属を命ぜられる。召集兵五十有余人が片山上等兵他一人に引率され、広三鉄道の駅へ向かう途中の道端には死体が所々に放置されているのには驚きだった。

広三鉄道の仏山駅で下車、部隊に到着、営庭に整列、村上部隊長に着任の申告、教育隊の宿舎割り当てを受けて入所する。聞くとところによると、この鳳部隊

は大阪の師団が満州で編成され、昭和十三年十月十二日、バイアス湾に奇襲上陸し、同年十月二十一日に広東を陥落占領した由緒ある部隊と聞く。明日からは現地野戦教育である。実戦さながらの救出救護教育だ。

気候は夏を思わせる暑さである。防暑衣袴を支給され着装する。点呼に明け点呼に暮れる毎日の日課だ。見るものすべてが珍しく奇異に感じた。とくに驚いたのはネズミが大きくネコと間違えるほどであった。

山もなく平地でクリークも多く、盛夏には四十度を超すことはざらである。水が悪いのか悪疫瘴瘍の地であると教えられる。いつの間にか一カ月の教育も終わり実務である。それぞれ勤務部門の配属命令を受けて任務に就く。これからが「初年兵はつらいよ」の実感が湧いてくる。一日の忙しさといったら筆舌には言いつくせない。起床に始まり、床の整理整頓、洗面、点呼、飯上げ、食缶返納、事務、雑役、週番上等兵の使役集合ですぐ飛び出さねばならぬ。すぐ昼がくる。また午前の繰り返しである。夕食を終われば宮庭で円陣をつくり行進し、土気高揚のための軍歌演習、点呼、

消灯、就寝である。またいづれを見ても上官ばかりで、班内を一步出れば敬礼づくめで、目まぐるしい日課である。

我々同期の桜は年令の差こそあれ初年兵としてすべて平等である。班長の指導で「同期の兵の会」を結成することになり、互選で会長の選任が行われ、私が選ばれたが反対も出来ずやむなく同意、大役を引き受けることになったが、何かスッキリとせず嫌な予感があった。引き受けるのではなかったと思ったがあの祭りだ。多数の初年兵の中には失敗も多い。予感のとおりで、ほんの些細なことでも、同期兵の代表で古兵の内務班にお呼び出しである。とくに行李（輜重兵）の班が多かった。大なり小なり毎日、私的制裁の連続である。

「初年兵諸君よ、しっかりしてくれよ」と言いたくもなる。革スリッパで頬を、時には銃の尾板で体をたたくかれ、よく顔や体に変形しなかったと不思議な気がした。考えれば本当に悪い回り合わせかと思ひ、自分だけがなぜこのように殴られなければならないのか、

殴られ役の会長なら「もうご免だ」と思った。しかしこれが部隊のルールならば致し方ないし、誰かが当たらなければならないならば、何事も運命だとあきらめることにした。

私は部隊本部勤務を命ぜられ、即日任務に就く。そのうちに作戦命令で、三水の患者療養所の強化が命ぜられ、そのため一部動員することとなり、私と新築一等兵の二人は本部要員として派遣され任務に就く。困ったことは古参兵はすべて大阪出身あるいは関西出身なので関西弁で早口に命令されるとたまらない。方言なので意味が分からず、問い直したりモジモジしてしようものなら頭の上で爆弾だ。一難去ってまた一難だ。本隊を離れてヤレヤレと思ったがまた一つ悩みが増えた。

この三水は著名な地であり、三水県として行政の中心の所在地であり、要衝でもあったようだ。昔の高吏高官の別荘地ではなかったかと思われる建造物が多く立派である。また広三鉄道の終点でもあり、環境的に

は良い所である。

この地に佐野兵団が集結し、香港攻略の期をうかがい秘策を練り、毎日猛訓練を重ね、機熟して行動開始、何度も失敗を重ねて、ついに昭和十六年十二月二十五日、あの劇的な偉業を立てたのである。その兵舎が自分が入っている患者療養所である。

私のイメージでは、療養所というからには内地における温泉地を連想して、さぞかし兵隊の患者の静養地ぐらいに思いこんでいたのであったが、その思いとは大分違っている。三大隊の敷地内の一角にあって、病床数は本部一階に四ベット、我々の兵舎はこの二階であった。道路を隔てて、向かい側にある病室は将校病室二室と、五十以上の収容能力の長屋式の病室があった。飯上げは三大隊炊事の給与なので不自由であった。板があるので担っている棒にかけている飯と味噌汁の熱いのがすべり、体に当たったのでビックリして肩から棒を離したのが因果ですべてをひっくり返してしまい、何十人かの食事がバーである。炊事の上等兵には制裁を受けるやら、それかといって部隊員を欠食

させるわけにはゆかず、三拝九拜して他の班の食事を少しづつ出してもらって急場はしのいだものの、部隊全員減食でまた叱責させられるやら、その日は厄日である。居候のつらさと、地形を知るところをマザマザと教えられた。その日から苦しい生活の繰り返しである。やはり軍隊だなあと思う。

作戦は終了し、動員兵力は仏山の本隊へ帰還し、私は居残りとなり常時の状態に戻り、静かになる。古参兵あるいは上官は初年兵と交代し内地帰還である。目の上の瘤がいなくなってホッとした途端に、一発ガンと食らった。古参の一等兵に殴られてしまった。「貴様、古参兵が満期しても、まだまだ上があるんだ、たるんでおるぞ」とまた一発。すごく強い鉄拳で目がくらむ。

満期兵が帰還してから途端に忙しくなった。初年兵と上官の二つの役割・作業の使い分けである。その一つは毎日第三大隊本部へ命令受領に行くことである。副官の前に整列した時、各中隊の命令受領者はすべて下士官である。一等兵の私が命令受領者では副官も心

もとなかったであろうと思ひ、自分も班長が来てくれればよいのにと思つた。しかし自分は本部付であるし、患者療養所本部の代表でもあるとの信念をもち、せめて古兵づらをしようと思つても、所詮、初年兵であるし、それは動作でわかる。やはり星の前にはいかんともしがたい、この時ほど一つでもよいから星が欲しいと思つたことはない。しかし各班長達は、私を親切に指導してくれたことは今だに忘れることができない。

一年が過ぎた。上等兵に進級した。この時ほど何よりも嬉しく思つたことはなかった。本部付として対外的には他部隊の兵や下士官と接触の機会を持つ私の立場としては、無理からぬ事と思つていただきたい。しかし上等兵の星も対外的、外出時には格好良いが、自分の部隊内にあつては古兵には全然通用しないものと、しみじみと味わされたものである。

その後、いろいろと刺激もつけ、経験もし、責任の重さも痛感した。療養所には医薬品があるので、持ち

前の心臓を發揮し、ギブ・アンド・テイクで第三大隊炊事の古參上等兵と親しくなり、次に広東野戦倉庫の曹長の外科の病氣を治療したことから一層親しさを増し、お陰で毎日、コーヒー、紅茶、ケーキ、パンには不自由しなかった。また夕食時には大隊炊事から、すき焼き用の材料をもらい、時々療養所戦友全員と会食をしたものである。

私の業務日課は、小さいながらも一応、一通りの報告事項は必要なのでご紹介すると、庶務事務（陣中日誌、日報、旬報、月報、命令受領等の報告事務）、経理（給与、会計関係一切）、発着（患者の入退院、患者の所持品預かり、患者輸送）の三割を一人で行っていた。患者が入院しても、重症でない限り即日仏山本隊へ後送するので比較的楽な作業であった。しかし本部は一人で、午前は命令受領と他部隊との連絡で暮れ、夜間は定期的報告書類整理を行うので、一日の睡眠時間は四時間もない激務であった。作戦出勤では十日間くらいの徹夜（一睡もできない）は時々あり、稀富軍医大尉が夜半外出から帰隊の折、よく健康に注意

するよう言われたものである。

気候は冬でも裸で生活できる土地であるだけに、夏の暑さは異常であり、伝染病の発生の要素もある。このため必ず手指消毒が厳しく、クレゾール液の臭いが体から抜けきららない。野戦で十二月の暮れに裸で餅つきを行った事も記憶に今だ残っている。

初めての雨期に入り、長雨で川が氾濫し、交通に難渋し、公用外出には参ったものである。軍靴が常に水浸しで不潔で、とうとう悪質の水虫に罹患し、八十六歳を向かえた年になっても今だに全快していない。

夜は比較的暮らし良いが、時々敵側から発射される迫撃砲弾が頭上をヒュルヒュルと鳴って飛んで行くのを聞くとあまり気持ちの良いものではない。この音が止まると落下するとの事で、この音に慣れるまでは夜も寝られなかった。私は外出の折、隊の近くにある台湾人経営の時計店に立ち寄った。素晴らしい懐中時計を見つけて質問すると、香港陥落時に入手したもので、中国に二つとないと店の娘の話である。そんな

事を聞くと急に欲望が湧き、他に売らないように頼んで、早速、自宅に手紙で送金依頼した。慰問袋の着くのが待ち遠しい、待っていた慰問袋が着いた。雑誌の間から拾円札が十枚出てきた。そうなると外出日が早く来ればと思った。待ちに待った外出日に時計屋に飛んで行き早速購入した。私はこの懐中時計を形見として秘蔵することとした。

ある日ちょっとした不注意でこの大切な時計のガラスを破損してしまった。早速時計屋に修理依頼した。一カ月を要することである。一日千秋の思いで直るのを待った。一カ月を経過したので時計屋へ出掛け。行くとまだ直らず広東に出してあるとのことだ。しかし変だと思った、故障ではなくガラス一枚なのにと思う。その後度々、請求したが誠意がなく冷淡である。腹立たしく思った。ある日、大隊長が私の時計を使用しているのを見かけた。外出日に時計屋へ出向き、その事をなじたところ、娘の顔が変わり、こわばったのを見て直感的に、あの時計は私のだと思っただけなら私はカッとなり、陳列台上の商品をメチャメチャに

し娘を突き飛ばして帰隊した。

その翌日、娘が謝罪しながら時計を届けに来たが、嬉しくもあり、その厚かましさにあきれたものである。

ある時、患者療養所で炊事の手伝いをしていた姑娘に、隊で飼っていた赤犬をせがまれて、くれてやった。夕方その姑娘が、お礼にと沢山の肉をくれた。ちょうどその夜は満月でもあったので、隊長の許可をえて、隊の亭ですぎ焼きパーティーを開き月見の宴を張った。宴も酣の折、姑娘が手作りのごちそうを届けてくれた。「謝々」と礼を言ったところ「先生、今日の肉は美味しかったか」と聞くので、「肉が柔らかく非常に美味しかったよ」と礼を言った。ところがその姑娘が「その肉は今日もらった、赤犬の肉だから美味しいだろ」と言ったのでビックリ仰天し、あいた口がふさがらなかった。兵全員が楽しく愉快であったが、一瞬騒然となつてしまい、知らぬこととは言え、皆で昼までかわいがっていた犬だけに、皆だまりこんでしまい、せつかくの月見の宴も台なしとなり、後味悪

く、戦友達に済まなく思った。姑娘も悪気はなく、中国では赤犬は食用との事で高級食との事である。所変われば品変わるという諺があるが、飼犬だけにあと味悪く、気味悪かった。

間もなく作戦命令で、第三大隊と共に出勤、激しい戦闘で傷者が多数出て、我々も不眠不休で活躍した。とくに印象に残っているのは瓦斯壕疽に罹患し、生命が時間の問題とのことで、足の大腿部からのこぎりで切断、その介添者をさせられた時、顔をしかめ悪寒がした。日中は傷者の看護、病床日誌作り、夜間は報告書作り、通信にと忙殺され、連日徹夜である。体が綿のようにクタクタになったと記憶している。作戦終了後と思うが、広三鉄道の沿線、西南に患者療養所を開設した。昔の高官の別荘を思わせる建築である。

本隊への公用連絡、患者輸送の帰途には、隊の前へ車中から荷物を落とせばよいので肉体的には楽であるが、給与は中隊給与であるために、三度の飯上げは食缶をかついで町内を横断してゆかねばならない不便さ

と、たまに町中でのゲリラの発砲する銃声を聞く危険地帯であって、環境はよくないが小隊なので楽であった。

幸せは、いつまでも続くものではない。本隊から公用連絡で来るようとの通報をうけ、早速に本隊へ公用出張をする。すぐ教育主任である竹友軍医中尉のもとに行くよう指示面会す。主任から現役志願をせよとのことである。青天の霹靂とは、こんな時に使う用語かと思った。私はあ然とし、主任に対し「私には年老いた母と妻子があるので、もっと若い独身で優秀な人がいるからその人達にお勧め下さい」と辞退、私はあくまで嫌だと反論し、他に適任者を選んで下さいと頼んだ。主任は非常に立腹、軍刀で切られるのではないかと、背筋に冷たいものが走った。頑固な主任で一方的なので困った。私も折れて現役志願のみを辞退して納得、広東陸軍病院の下士官教育に行くことになった。西南における自分の私物も整理できず直行である。

しかし、きつい教育であった。体力を鍛えるのか、足を鍛えるのか知らないが、毎朝点呼前に往復八キロ

の行程を駆け足である。営庭に整列、点呼時に行動について反省させられ、竹刀でたたかれるのは嫌なことである。一番嫌に思ったのは、看護婦に欠礼した時、婦長に直立不動で叱責されたことである。これも軍隊かと従うことにした。

高度な衛生学の再教育である。特に人体解剖の見学だけは気味の悪いものであった。私にとって長い下士官候隊教育ではあったが、苦しくもあり楽しくもあった思い出である。やっと教育も終了、原隊復帰となる。ところが、原隊は徐州第六十五師団（専兵団）に転属命令となり、本隊は仏山を引き揚げて、現在タークに集結とのことである。

一年有余、なじみ、住み慣れた三水、西南、仏山を二度と見ることもなく集結地へ直行、部隊長に部隊復帰の申告をする。班内に案内されると細長い兵舎であり、両側が床であり、中央に長く机が作りつけである。毎日が食っちゃ寝の、のんびりムードである。ある時、このムードが壊され喚声が高くなり、ふと見る

と、神田班長が青くなって班内のテーブルをぐるぐるとして逃げ回っている。これを追って小林一等兵が抜刀して追っ掛けていたのではないか、これを誰もが止めるでもなく、あれよあれよと見ているのみである。

何が原因でこんな事態になったのか分からないが、恐らく侮辱のことか、あるいは日頃の不満が爆発し、突発的に起こったことであろう。このままにしておけば大変な事態になると直感、小林一等兵の後方から引き止めたのであるが、かなり興奮していて静まらなかったのをやつのことで止めることが出来た。その理由を聞き、彼をなだめた。この事件はこれで落着いたと思ったが、同年兵代表で私のところへとぼちちりがきて班長室へ呼び込まれひどい目にあつたが、今後二度とこのようなことを起こさないことを誓って落着いた。

輸送船「うゑいるす丸」に乗船、珠江を下り上海への航海、何事もなく波穏やかであることを祈って、事故もなく汕頭沖にさしかかった。進藤部隊長が輸送指揮官であり、対潜対空監視哨も部署に配置、駆逐艦の

護衛等万全の措置である。本部要員はキャビンにおいて、輸送業務の書類整備にかかっていた。船内の移動兵は、天気も良く波も静かであるところから甲板上に集合、点呼、全員訓練の準備中、折しも、パリップ、キンキンと大きな音響がした。私はキャビンにいたけれど、音と共に火が走ったような気がする。机上に広げられている書類を公用行李の中に納め、甲板へ出て二度ビククリ、阿鼻叫喚、地獄図さながらの状態で、甲板上は血の海。情況によれば、海岸線の山を背に海面すれすれに飛来した敵機が急上昇し、三十六ミリ機関砲の掃射と、爆弾投下との話で、身の毛がよだち、ゾーツとした。命中していれば轟沈かもしれない。

被害は数十人の戦死傷者と馬匹二頭死亡とのことである。船団護衛の駆逐艦でも傷者があつたと聞く。船団はすぐ引き返し香港に寄港、船舶司令部に戦死者を引き渡し、戦傷者は香港陸軍病院に入院手続きを行い、ただちに上海に向かう。このような事態で事務は山積みし、精神的にも緊張の連続である。暗い中に

あつて、突如、ポーッと汽笛が連続鳴り響く。今度は魚雷攻撃にでもやられたかと早合点、スワツとガバリと起きた。ところが濃霧のための汽笛とのことでホッと胸をなでおろす。間もなく揚子江に入った。河幅が広く海と同じである。上海も目前である。上海から鉄道で南京へ、舟で対岸に渡り、南京から無事に徐州入りすることが出来た。

【解説】

体験記執筆者・竹内章氏は愛知県半田市出身であり、本来なら、第三師団歩兵第六連隊へ入隊であつたろうが、戦時、特に広東攻略作戦に参加した大阪の第四師団編成の第一〇四師団（鳳兵団）に召集、特に静岡の第三十四連隊補充隊であつたという。

鳳兵団は大阪師団管区から名古屋師団管区へ移り、従つて、愛知・静岡・岐阜の壮丁をもって逐次編成が代つたようである。しかし名古屋管区編成の第三十八師団（沼兵团）は、後に中山地区を占拠し、大東亜戦争時には香港攻略、インドネシア、ガダルカナル、

ラバウルへと転戦している。大東亜戦争勃発後の鳳兵
団Ⅱ第一〇四師団は、大阪師団管区から名古屋師団管
区へ移り、竹内氏はその頃、鳳兵団へ入隊したのであ
る。